P2-026

産後１か月の母親のQOLと育児不安の実態

野原 真理、中田 久恵

つくば国際大学　医療保健学部　看護学科

【目的】
産後１か月の母親のQOL（quality of life）育児不安の実態についてQOLの得点差で比較し明らかにすることである。

【方法】
都市部の病院の産科の母親学級に参加した初産婦124名に対し、産後1か月に質問紙調査を行った。調査内容は、QOL12項目と、育児不安として子育てで心配なこと、子育ての孤独感、子育ての負担感、母親として不適格と思うことの４項目である。QOLはオリジナルのスケールを用いて得点を算出した。育児不安の４項目はその有無と、有りの場合には内容を記述してもらった。分析方法はまずQOLを中央値にて２群に分け、高得点群と低得点群それぞれ育児不安の４項目の有無を単純集計した。そして４項目おのおのの内容記述について質的に分析した。

【結果】
QOLの高得点群は60名、低得点群は64名であった。育児不安４項目の割合は、子育てで心配なことがある者は高得点群40名（66.7％）、低得点群50名（78.1％）であり、記述内容は「母乳のこと」、「子どもの病気や発育」など未経験の育児への心配が示された。同様に子育ての孤独感がある者は前者14名（23.3％）、後者17名（26.6％）で、「夫の協力が得られない」、「育児による拘束感」によって一人で育児をしていると感じていた。また子育ての負担感がある者は前者21名（35.0％）、後者34名（53.1％）で、「子どもへの対応」や「自分の時間がないこと」「頼れる人の有無」「生活の変化」、「経済」「自分の体調」によって負担を感じていた。さらに母親として不適格と思う者は前者21名（35.0％）、後者32％（50.0％）で、「子どもからの発信を読み取れない」、「育児のスキルが不足している」「家事のスキルが不足している」「育児を優先できない」などが記述されていた。

【考察】
初産婦では、QOL低得点群の方が育児不安を感じる者が多いが、高得点群においても存在しており、アンビバレンスな状態であることが明らかとなった。育児スキルへの具体的な支援が求められる一方で、息抜きしながらの育児を承認する支援の必要性が示唆された。そして母親の息抜きのためには、ソーシャルサポートや支援体制を整えることがさらなるQOLの向上につながることが考えられる。

P2-027

自閉症幼児の母親を対象としたストレスの内容の違いによるペアレント・トレーニングの効果

島田 明子[1]、成田 泉[1]、水内 豊和[2]

[1]富山大学　大学院　人間発達科学研究科、
[2]富山大学　人間発達科学部

【目的】
ペアレント・トレーニング（以下PT）は、親に養育技術を習得させるものである。しかしこれまでのPTでは、子どもの障害や年齢、問題行動の様相には配慮されているものの、そもそも受講する親自身の特性を考慮しておこなわれていない。そこで本研究では、自閉症幼児の母親を対象としたPTで、養育にかかわるストレスの内容の違いによる効果を検証し、より効果的なPTのあり方について検討する。

【方法】
児童発達支援センターに通所する自閉症幼児を持つ母親のうち、保育士により勧奨された母親8名を対象に、各回において母親でもあり一人の女性でもある「個人としての自分」への支援内容と、従来型PTである子どもの養育技術の習得に焦点化した「母親としての自分」の支援内容の2つのパートからなる計5回のプログラムと、プログラム前後に個別面談を実施した。効果の評価手続きとして、（1）育児不安尺度、（2）家族の対応自信度、（3）育児ストレスインデックス（PSI）を用いた。

【結果】
参加者全員に関しては（1）育児不安尺度と（2）家族の対応自信度について、PT前後に得点の有意な差は認められなかった。（3）PSIについては「親としての有能さ」のみ得点上昇に有意な差が認められた。PSIによる養育ストレスのタイプ別にみると、育児不安尺度では親ストレス高群（P-H群）が、「中核的育児不安」のみ有意な差をもって減少した。また家族の対応自信度については子ストレス高群（C-H群）において有意な差をもって上昇した。

【考察】
プログラム後に「親としての有能さ」について対象者全員にプラスな変化があったことから、母親が子育てに向き合う自信になったと考える。また今回の研究では、P-H群とC-H群の効果を比較した結果、P-H群の「中核的育児不安」得点が減少したことから、P-H群はプログラムを通して親としての養育技術への不安が軽減され自信へとつながったと考える。家族の対応自信度についてC-H群において有意な差をもって上昇したことについては、このプログラムを通してソーシャルサポートの活用を前向きに考えるようになれたと考えられる。またこの群にはプログラムを通して「ママ友」ができたことも結果につながる大きな要因であったと推察される。このように、PTの提供と実施に際しては自閉症児の保護者であるという子どもの様相だけではなく、もっと保護者自身の心理状態などの特性を勘案することが必要であろう。

Presented by Medical*Online